

第21回国際日本学シンポジウム
ーグローバル・ヒストリーと国際日本学ー
【総括】

小玉 亮子*

国際日本学とはどのような研究を進めているところなのだろうか。今回のシンポジウムで21回目を数えるまでの蓄積を持つ国際日本学に対して、外部からはいまだ素朴な疑問が浮かぶ。国際という言葉に日本という国家の単位を表す言葉が接続するとき、従来の国際関係論とはどう違うのだろうか、あるいは、歴史研究でいう世界史での議論とはどう異なる議論が展開されるのだろうか。

日本の高等教育における歴史教育は、戦前からの日本史、東洋史。西洋史の3区分を引き継いで来たが、もはや現在では、この3区分で歴史学が議論できないことはすでに広く認識されているのではないだろうか。中等教育段階では、日本史と世界史の区分で歴史教育が行われていたがこれから歴史総合という名称で、日本史と世界史の区分によらない歴史教育が開始されることがすでに決定されている。

このような中、国際日本学研究は、歴史研究における従来の区分に対して、どのような議論を試みるものなのだろうか。また、歴史研究にとどまらず、グローバル化する現代においてどのような議論を迫るものなのだろうか。

本シンポジウムは、このような外部からの国際日本学への問いかけへの応答の一つとして、グローバルヒストリーというテーマが設定された。

シンポジウムでは、佐々木泰子グローバルリーダーシップ研究機構長からの挨拶の後、古瀬奈津子グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教

育研究部門長からの趣旨説明がなされた。

趣旨説明の中では、「グローバルヒストリーという一国史に捉われない新しい歴史の捉え方は、日本というものを外からの目で相対的の把握したいという私たちが目指している国際日本学と共通性があると思います」と述べられ、グローバルヒストリーと日本史を関係づける試みとして、今回のシンポジウムが設定されたことが説明された。

午前中には、ジョーン・ピジョー氏（南カリフォルニア大学）の「日本史は世界史のなかにどう位置付けられるのか？」の講演が行われた。講演の中では「日本史あまりを知らない人々」に向けて語る日本史の試みが論じられ、日本史以外で使われている視点を日本史研究に取り入れ、比較を行い、類似点を導き出すという方法が提起された。その事例の一つとして、「王権」というテーマを立て、それが世界史全体ではどう議論されているのか、日本に関する研究蓄積を世界史全体での研究動向に位置付けることの試みと意義が論じられた。講演の詳しい内容については、ピジョー氏の報告に譲るが、講演の議論の中から、誰に向かって語るのか、というオーディエンスを意識した問いが、自らの研究方法の問い直しにつながることに、自らの視野の転換・拡大につながることに改めて気付かされた。

誰がオーディエンスかという問いは、ピジョー氏の報告では、日本史を知らない人々、特に日本で暮らす人々以外のオーディエンスを指す。しかし、こういった問題提起は、オーディエンスの多様性についても想起させる。従来の歴史の言葉が、

*お茶の水女子大学教授

現代のグローバル社会に生きる多様なオーディエンスに届くものなのかどうか、そういった観点からも、私たちの研究の視点が問われていることが示唆される報告であった。

午後は、まず、グローバルヒストリー研究を牽引して来た羽田正氏（東京大学）の基調講演から始められた。講演の中では、以下の二つのことが話された。第一に、グローバルヒストリーが新しい世界史を生み出す方法であること、すなわち、ある時期の見取り図を描くこと、時系列にはこだわらないこと、横のつながりを意識するという方法であることが示された。そしてそのことによって地球市民というアイデンティティの模索、何らかの中心史観から脱却して、関係ないしはつながりに注目するものであることが説明された。特に、どこに語り手のポジショナリティがあるのか、それを誰に向かって語るのか、グローバル化した社会の中での立ち位置の重要性が論じられた。

第二に、グローバルヒストリーと日本史の関係についての議論がなされた。日本史において日本というものがすでにそこにあるものとして論じられているのではないかと、日本に対する諸外国という時、諸外国というものがすでにあるのか、という問題提起から議論が始められた。ここでは、一国史という単位や、考え方それ自体を問い直す議論が論じられた。

基調報告の後、日本をテーマとする三つの研究発表がなされた。古瀬奈津子氏（お茶の水女子大学）の「東アジアにおける王権の古代から中世へ」では、日本の古代の終焉を、貴族制の崩壊過程として描き出すことによって、中国における貴族制の崩壊と対応していることを示すことができることが論じられた。

続く、芹澤良子氏（お茶の水女子大学）の「衛生のグローバル化と日本」では、ハンセン氏病対策がグローバルな課題へと変容していく中で、各国単位での国内の課題が、国際的な標準化・基準に準拠するものに変容する過程が分析された。こ

の動きの中で日本におけるハンセン氏病への対応が変化していくプロセスが明らかにされた。

最後の本林響子氏（お茶の水女子大学）「日本人の海外移住と日本語教育支援政策」においては、戦後日本における海外移住促進政策が移住者支援、そして日系人との協力へと移行していく過程に焦点が当てられ、日本語教育の展開がアイデンティティとその変容の問題との関係で議論されることが明らかにされ、話者による相互行為としての言語と制度化された言語の関係にあるずれについての議論がなされた。

最後のパネルディスカッションでは、フロアからの質問に答える形で議論が進められたが、日本史とグローバルヒストリーとの関係を考える際のいくつかの重要な論点が示されたように思われる。その一つが、アイデンティティとポジショナリティの問題であるように思う。

グローバルヒストリーは一国史という枠ではないスケールで歴史を捉える方法である。今回の国際日本学のシンポジウムで示唆されたことは、グローバルヒストリーによって国という枠組を超えた見取り図を描こうとするとき、日本人という立ち位置や日本という枠それ自体から自由になることではなく、むしろ、自らの立ち位置がどのような諸関係の中にあるのか、そして、その諸関係がどのように変容していくのか、が問われることになるということではないだろうか。自分自身のポジショナリティを問い直すことを可能にする方法としてのグローバルヒストリーの持つ意義を改めて考えるきっかけになった。

だとするのなら、国際日本学は自らのポジショナリティをどう捉え直すことになるのだろうか。日本がそもそもあらかじめそこにあるものであるという理解をしないとすれば、日本学はどのような議論を進めるのだろうか。グローバル、世界、国際といった概念との関係で進められる日本学に、今後とも学んでいきたいと考えている。